

介護にDX 職員の負担を軽減

尾道の特養「星の里」視察受け入れ成果共有

社会福祉法人尾道さつき会の特別養護老人ホーム「星の里」(尾道市久保町)が、デジタルトランスフォーメーション(DX)の活用で職員の負担軽減に成果を上げている。今後、サービス需要の増加と人材不足が見込まれる介護業界では、業務の効率化が喫緊の課題。同会は本年度から他施設の視察を受け入れ、普及を後押ししている。

(余村泰樹)

星の里は県が昨年度に「デル施設」に選ばれ、入所者の見守りシステムな

0万円で導入。ベッド下のセンサーマットが離床や体動を感知して職員のスマートフォンに音声で知らせるほか、カメラが撮影した居室の様子も遠隔で確認できるようになった。

これによって夜勤の業務負担は軽減した。いずれも1日当たりの職員の平均値で、3時間24分だった巡回時間は2時間10分に減少。部屋への訪問は5・8回から2・6回となり、1万4千歩近かった歩数は1600歩余り減った。職員アンケートでは、約6割が夜勤で精神的な余裕を持てるようになったと回答した。

星の里への視察を受け入れ、入所者の見守りシステムを紹介する尾道さつき会の職員(左から2人目)

他にも尾道さつき会の施設では無線通信機(イ

入所者見守りシステム→夜勤の巡回時間減少

ンカム)や勤務表作成ソフト、議事録作成用の人工知能(AI)を使ったボイスレコーダーなどを導入し、職員間の情報共有や労務管理の労力を大幅に削減。成果を共有するため、5月から星の里などで視察の受け入れを始めた。同15日には府中町の施設職員などが見学し、11月半ばまでに県内約30施設から申し込みがあるという。

県介護政策課によると、団塊ジュニア世代が65歳以上となる2040年ごろには高齢者人口がピークを迎え、県内の介護人材は約1万人不足する見込み。人材の確保や定着、生産性の向上が課題で、県は26年度に広島市安佐北区の特養を2カ所目のDX先進モデル施設に指定した。

星の里の山下清文施設長(51)は「人材不足で職員の負担感が増している。デジタル化による効率化でできた時間はサービスの質の向上にもつなげていきたい」としている。